

月刊 ダム日本

新春座談会

足立敏之氏 田代民治氏

『日本のダム技術の未来を考える』

～ダムを巡る環境の変化にどう対応すべきか～

出席者（順不同・敬称略）

- 足立敏之 参議院議員
 - 田代民治 土木学会会長（鹿島建設㈱代表取締役副社長）
- 司 会
- 中野朱美 （一財）日本ダム協会参事

No.867 1

2017



新春座談会

足立敏之氏 田代民治氏

『日本のダム技術の未来を考える』

～ダムを巡る環境の変化にどう対応すべきか～

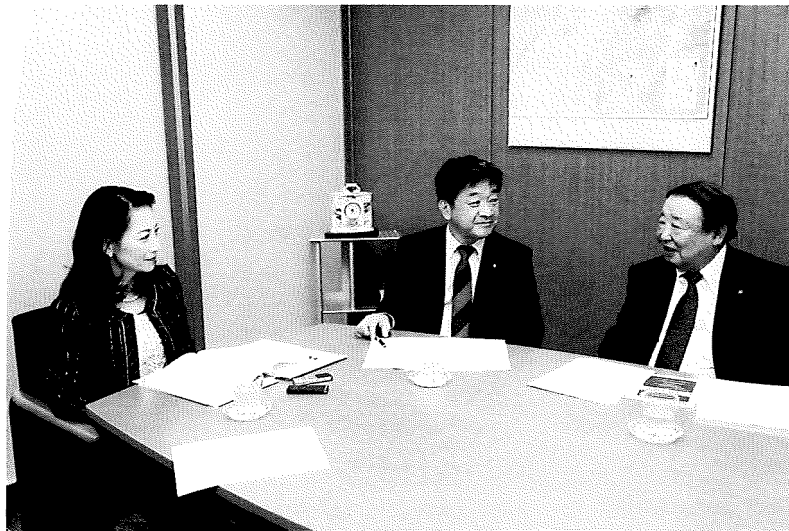
出席者（順不同・敬称略）

□ 足立敏之 参議院議員

□ 田代民治 土木学会会長（鹿島建設(株)代表取締役副社長）

司 会

□ 中野朱美 （一財）日本ダム協会参事



新春座談会ということで、いずれもダムの技術屋である足立敏之氏（参議院議員）と、田代民治氏（土木学会会長）に、ダムの現状、将来について、課題や役割などを浮き彫りにすることで、ダムが今後どうあるべきかを伺うことにしました。

中野：本日はお忙しいなかお集まり頂き、有難うございました。まずは、お二人の近況についてお聞かせ下さい。

足立：参議院議員の足立敏之（あだちとしゆき）でございます。皆様のお支えを頂きまして、本

当にありがとうございました。ダムの技術屋として初めての参議院議員ということで、しっかり皆様の期待にこたえて頑張っていきたいと思っています。

田代：第104代土木学会会長として就任しました田代民治（たしろたみはる）でございます。就任以来、結構な時間を学会活動に向けています。鹿島建設に入社以来、ダム現場一筋に仕事をしてきて、足立さんとは、宮ヶ瀬ダムで一緒に仕事をさせて頂いた仲でもありますが、お互いにこんな立場で会談するなど夢にも思いませんでした。

ダム検証について

中野：有難うございます。参議院議員と土木学会会長というお二人のダム屋さんには、ダムの現状からお話を伺って参りたいと思います。現在ダム検証も進み、残り4事業になっていますが、なかなか本体工事がなく、再開発や既設のダムの嵩上げがメインになっていますが、これからダムはどうなるのか。

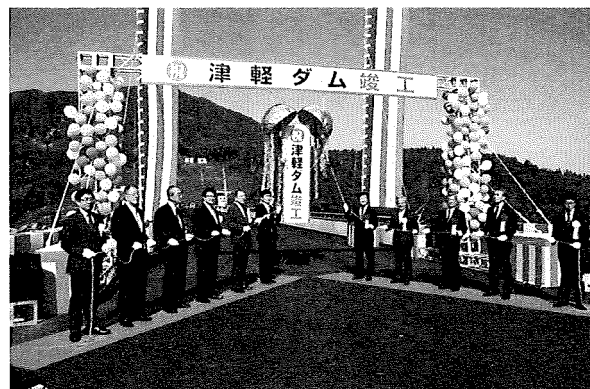
まずは、足立さんからダム検証についてお伺いします。

足立：ダム事業の現状ですが、私は国土交通省水管理・国土保全局長、あるいは技監の時にダム検証を終えて、再起動、再稼働したダムのプロジェクトを幾つかつくってきました。そういった事業が今一斉に動き始めていて、つい最近もサンルダムの定礎式にも行かせて頂きましたし、横瀬川ダムの着工式にも行ってきました。

そのように、ダム検証で止まっていた事業が動き始めて、各地域ですごく大きな期待を集めている感じがします。それから、ダム検証の間に進んできたダム再生のプロジェクトですが、先日、鶴田ダムの再開発の竣工式に田代土木学会会長と一緒に行かせて頂きましたし、津軽ダムの竣工式にも行かせて頂きました。その他にも、鹿野川ダムだとか長安口ダムだとか、天ヶ瀬ダムなど各地でダムの再生プロジェクトが最盛期を迎えていて、日本独自の技術として大いに注目を集めているところだと思います。民主党政権下で大変厳しい時代の状況からすると、今はかなり明るくいろいろなプロジェクトが動き出している、そんな状況だと思います。

地球温暖化とダムの役割

中野：明るい兆しが見えてきましたが、一方、地球温暖化の影響とも言える気候変動によって災害が巨大化している現状がありますが、温暖化に対してダムはどう対処すべきでしょうか。ダムにしかできない役割をお聞かせ下さい。



津軽ダム竣工式の足立議員（中央右）

足立：国土交通省にいた時に、地球温暖化対策を施策として結びつけていこうと取り組んできた立場からすると、地球温暖化に伴う気候の変化、これは毎年どんどん顕著になってきたと思っています。特に今年は、これまでに経験したことのないコースで台風が来たり、これまで余り雨が降ってなかったところで猛烈な雨が降ったり、明らかに気候条件が極端になってきているのは解ると思います。

こうしたことを考えると、特に東北とか北海道のように、もともとそれほど雨の降らないところに、関東で降っているぐらいの雨が降り始めたと思うと、河川の流域の上流部で少しでも水を溜める施設を設けておくことの大事さを私自身痛感しています。上流に溜める施設といえは、遊水池などもありますが、やはり即効性という観点では、ダムはすごく大きな役割を果たすと思います。

例えば、既存のダムを嵩上げしたり、改造したりして、洪水調節能力をアップさせるのも非常に重要なことだと思いますが、それだけではもう足りなくなってきていて、流域の上流に少しでも水を溜める、洪水を防ぐ施設として新たなダムの建設が、これから再び注目されていくのではないかと思います。温暖化が厳しくなると、ダムの出番は、新設、改造、両方の分野で多くなっていくのではないかと思います。



中野：なるほど。

田代：私も、今言われたことは本当にそうだと思います。もう1つ、日本は温暖化が進むと、山の雪が少なくなりますね。確かに、治水の面だけではなくて、利水の面でも、雪解けの水を溜めておくという大事な役目が出てくるのではないかなと思っています。

中野：温暖化が始まると雪が積もらなくなると、その分、水がなくなるということですね。

足立：雪が降るタイミングも変わってきますし、今までより雪解けも早くなりますね。

クリーンエネルギーとしての役割

中野：そうですね。いろいろところで工夫があると思いますが、再生可能エネルギーとして水力発電により電力を生み出すダムについてはどうお考えですか。

田代：ダム屋から見ると、なぜ水力発電の話が出ないのかと思います。国交省関連と農水省関連と電力会社のダムがありますが、もう少しコラボレートした方がいい。水力発電は海外では一般的に利用しているので、日本でももう少し利用してもいいのではないかと思います。

特に海外進出する時には、水力発電なしでダムだけ造るのはあり得ない気がします。その辺はダム屋の足立議員に期待しているところで、もう少し突っついて貰いたいですね。

足立：再生可能エネルギーの大事さは皆さん解っていらっしゃると思いますが、我が国の施策的には、今は風力や太陽光発電にシフトしていて、そちらの優遇措置はかなり充実している。

一方、水力発電に対する優遇措置は小さいですね。そこをもう少し経済産業省にも理解して頂いて、水力のクリーンエネルギーとしての役割を認識して売電単価をもっと優遇して頂ければ、どんどん水力の可能性が広がっていきますので、私はそこをしっかりと訴えていきたいと思っています。加えて、ダム屋の先輩である竹村公太郎さんがよく言っていると思いますが、ダムの運用を少し変えれば、もっと水力エネルギーが生み出せると思います。

今、多目的ダムでも、出水期、非出水期の設定をして、水位を上げたり下げたりしていますが、水位を下げていた時期の水位をもう少し上げてみるとか、ふだんの水位をもっと高くするとか、運用の時期を降雨予測と組み合わせて、できるだけ水位を高く保っていくようにすれば、相当程度水力もエネルギー面でプラスになっていくと思います。そういう施策も組み合わせることでやっていくことが大事だと思います。

そのほかにも、砂防ダムを含めて、売電単価さえ上がればもっとペイしていくところがたくさんありますから、そういった面で旗振り役として頑張っていきたいと思っています。

中野：期待しています。まずは一番変えられるお立場にいらっしゃるの、よろしくお願いします。

環境にも優しいダム

田代：水力発電の良さ、クリーンエネルギーという話をもう少し我々もアピールしなくてはいけないですね。我々はクリーンエネルギーとし

て、風力発電とか、太陽光発電などの設備を造っていますが、太陽光のパネルはいずれやっかいな産業廃棄物になりはしないかと心配になります。

また、古いアースダムは、1000年保持しているものもあり、最近のダムでも100年以上は優に機能できます。風力発電や太陽光発電は今はいいけど、そのうち古くなったりすると、廃棄物の問題も出てくる訳ですから、すべてが環境に良いものではない。そういう意味では、水力発電の良さをもっと我々もアピールしなきゃいけないし、ぜひそういう活動をもっとやっていきたい。土木学会でもやりたいなと思っています。

ダム技術の継承について

中野：お願いします。ダムは再開発して、発電量を上げるとか、いろいろ工夫ができる構造物だと思います。確かに、太陽光パネルとかは長い目でみると、インフラの老朽化が進んだ時にどうなるかという心配はありますね。

ちょっと話題を変えましょう。ダム技術のことですが、今、インフラの老朽化の問題が出てきて、少子化で人手不足が進んできています。今後、若者に対してダム技術をどう継承していけばいいのか。若者の興味を引き出すアピールの仕方は何か、足立さんが考えておられることをお聞かせ下さい。

足立：そもそも、私も田代さんも同じですが、ダム造りは楽しいです。もっとその楽しさを解って頂き、共有することができたら、たくさんの子供たちがこの世界に入ってきてくれるのではないかと思います。宮ヶ瀬ダムではできるだけ多くの皆さんに現場を見て頂く開かれたダム造りの施工現場としていろいろな取り組みをしました。そういうことを体験した人たちが、ダムマニア、ダムファンになり、リピーターとして戻って来てくれる。そんな中でダムの技術屋になりたいと思う人が出てきて頂けるとありがたいと思います。残念ながら、うちの息子



はそうなりませんでしたが(笑)。

ダムづくりの醍醐味

中野：ダムマニアの方は発信力がありますね。足立さんは、ダムの事になると本当に楽しそうに話されますね。

足立：それだけ現場は楽しかったということですよ。

田代：よくダムは総合技術と言われますが、コンクリートはもちろん、土質や岩盤も理解しなければなりませんし、それから水の関係や鋼構造物も必要で、土木技術全てに関わっています。さらに土木の一番すごいところは、自然と対峙しながらやっていくこと。ほかの工学では、本当に自然と向き合っているかということ、そこまではない。いろいろな学問を使いながら自然とつき合っているのは物すごく面白い。それと、発注者も請負者も協力会社も地元の人もみんな一体にならないとできないという一体感。技術の面白さと一体感はダムじゃないと味わえない。これは、実際にやってみないと解らないのでは？と思いますね。多分、足立議員もそれで、はまったんだろうと。私もそうですから。

宮ヶ瀬ダムではスローガンとして「ダムづくりは夢づくり」と掲げましたが、本当にそういうイメージをみんなが持ってやれる面白さがあ



サンルダムで祝辞を述べる足立議員

ると思いますね。

土木学会の取り組み

中野：田代さん、いま土木学会の会長をされていて、取り組んでおられることはどういったことでしょうか。現場見学など定期的に開催する形にして頂けると継続していきますね。そうすると会長在任1年では足りないのでしょうか。

田代：そうですね。土木の魅力は、現場での物づくりにあると思います。土木学会と言えども現場第一がベースになれば、土木学会たり得ないと思うのです。そういった意味で、平成28年度会長特別タスクフォース「現場イノベーションプロジェクト～次世代へ繋ぐ現場のあり方～」を設置して活動を進めています。書類や図面を作る人たちも現場に出て、実戦でやれる雰囲気づくりをぜひやっていきたい。これをきっかけにして、土木学会は出来て100年経ったのですが、次の100年はそういう事に向かうベクトル、方向付けをつくりたいと思っています。

中野：土木の次の時代の担い手、若手を育てることは必要だと思いますので、現場に出て行ける策があると土木の魅力も広がっていくのではないかと思います。

ダムで開発した技術が 様々な現場で役立っている

足立：ダム現場の魅力ですが、2つほど紹介していいですか。ひとつは、先日、四国の横瀬川ダムの着工式に行ってきました。四国の一番端っこの高知県宿毛市で造っているダムですが、その副所長や工務課長はみんな以前にもダムをやっていました。それくらいダムは魅力あるプロジェクトではないかと思うのです。東北でも、一度ダムを経験した人が引続きダムをやりたいと思って、現場に戻ってくる。八ッ場ダムもそうですが、そういうふうにして頂けるようなプロジェクトがもっとたくさんあると良いのですが。多分、ゼネコンの皆さんも同じだと思います。ダムをやった人はまたダムをやりたいと思っているでしょうし、そういうダム技術のワクワクするところをみんなで共有することが出来たらいいなと思っています。

もうひとつは、先ほど田代さんはダムは総合技術と言われましたが、それが顕著に現れたのが東日本大震災です。あの時、ダム技術者が被災地に相当駆り出されて、復旧・復興面で素晴らしいマネジメント技術を発揮しました。ダムのプロジェクトは総合的なので、ダム造りを学ぶことで、土木の一番最先端のマネジメント技術を学ぶことが出来るのではないかと思います。復旧・復興事業でもダム技術がいろいろなところで応用されています。例えば海岸堤防にもCSGを使っているし、砂防ダムだってCSGやRCDを使っています。このように、ダムで開発した技術がいろいろな分野に使われるようになりました。ダム技術は伝統的な土木技術として優れた技術だと思いますので、多くの技術者にちゃんと一回はダムを勉強しようということを、役所はもちろん、ぜひゼネコンの方でもしてもらえたら、ダムの魅力をもっと感じてもらえる人が増えて、その技術を伝承していく際にも役に立つのではないかと思います。

田代：ダム事業については、ダムはもう要らないと言われて、一時、技術者がちょっと萎縮する時代がありました。本当は逆だと思いますね。土木技術者としては、ダムをやっていたことに誇りを持って貰いたい。昔のダム屋さんの言動をみていると、私たち自身をもっと誇りを持たないといけないと思います。ダム屋さんに限らず、昔の技術者は立派だったが、今はそういう気概のところが違って来ているのではないかと案ずるところです。そういう意味では、ダム屋が一番昔の姿に近いのではないか。そんな思いもあります。

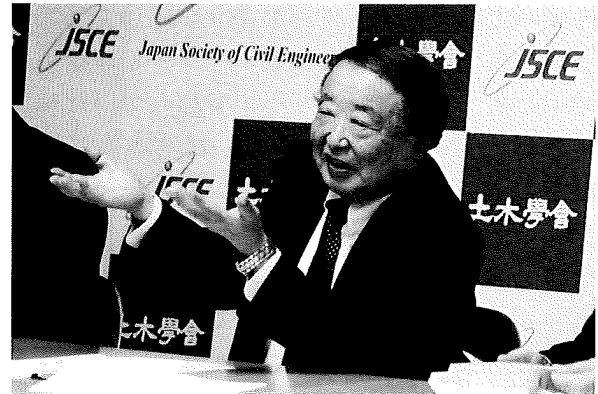
ダムの現場での議論から人も 技術も成長していく

足立：ダム屋が土木学会長になったり、参議院議員になれたのは、今言われたことの「証」ではないかと思いますが、どうでしょうか。

中野：そうですね。ダムを知ると土木の全体が解る土木技術の集大成と言われますね。

田代：先程、足立議員が言われた復興事業でもそうですが、ダム事業では地元の人とかそこで働く人がたくさんいる訳です。その辺もちゃんと見ていないといけない。自分の所属の人間だけを考えてしまうと、仕事としては絶対にうまく進んでいかない。みんなが一体なることを足立議員が所長の時もしょっちゅう言われていましたが、そういう一体感を醸し出せるようにやっていかないと。みんなが動いて、みんなが楽しく仕事をして、地元の人にも本当に喜んで貰える。そういう事を味わえるのはダムのマネジメントの醍醐味の1つです。書類で仕事をするのではなくて、現場で人を相手にして仕事をする。もちろん私も当時は大分怒られましたけど…(笑)。

足立：現場で熱い議論を闘わせるのも、技術屋だから出来るのであって、そういうことで自分が成長出来ると思います。



土木学会での田代会長

田代：それは、ありますね。

足立：技術論を闘わせるのはとても大事なことです。そういう体験が出来るからこそ、ダム技術は伸びていく。人も技術も現場を経て進歩し成長していく、そう思います。

中野：そうですね。今はRCDやCSGのダム技術もどんどん進んで、広がっていますし。それらをもとに将来の技術開発が方向付けられているのでしょうか？

足立：技術の開発面だけではなく応用にも目標を持たせると良い効果が出てくるのではと思います。

ダム造りに関する新技術の取り組み

中野：次に、情報化とか市場開拓に話を進めていきたいと思います。これからどういうふうに関海外進出を進めていけばいいのでしょうか。国内市場を守りながら海外に打って出るの目標の1つだと思うのですが。

足立：宮ヶ瀬ダムは、もう20年ぐらい前の施工ですが、三次元のCADでいろいろ検討もしていました。最近、i-Construction (アイ・コンス

トラクション)が注目されていますが、私はもうずっと前からやっていたような感じで見ています。宮ヶ瀬ダムでは振動ローラーも自動化していたし、走行をレーザーで管理していたし、そういう意味では、当時から最先端の技術を使ってダム現場では施工していたと思います。ダムは大規模でそういう目新しいものを試しやすいこともあるのです。こうしてダムで学んだことが、例えば空港の整備や道路の整備などに使われるようになってきているのです。

今、最新と言われる現場を見に行ったら、以前に経験したことがあるというようなことがよくあります。一応、「よくやっていますね」と褒めてはきますが、かつて極めて先進的なことに取り組んでいたのだなと思うと感慨深いですね。そういう意味で、これからの建設市場をリードしていくのも、ダム技術の大きな役割ではないかと考えます。

日本が今備えている、ソフトも含めた技術を海外に展開していくのは、とても大事です。そういった技術を持った日本が世界をリードしていかなくてはと思います。

ダム技術に自信を持って欲しい

田代：生産性の向上は、土木の仕事でダムが一番遅れているように見えるかも知れませんが、RCD自体、工法から変えているのです。私が会社に入った頃から生産性向上はすでに目標にしていたから、今更の感さえありますよ。

中野：よく考えてやっていますね。

田代：そう。現場と一体になった工夫はすごいものがあります。

足立：機械化施工を入れて、コンピューター管理して、施工技術はどんどん進んでいる訳ですから。

田代：宮ヶ瀬ダムの時もいち早く三次元CADを導入しましたし、施工の自動化もしました。



新技術は絶対にうまく使いこなすようにと先輩から言われ、伝統的にダムは新しいものを取り入れてきました。海外進出をいろいろ言われますが、生産性の向上とか品質向上の技術は、インフラを造っていく時には絶対必要です。技術水準を保持していれば、時期が来たら海外へ出て行っても十分だと思っています。世界は広いですから。

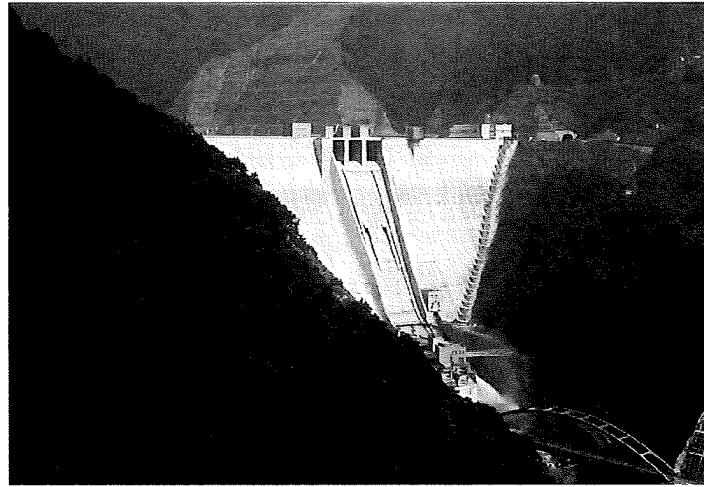
中野：焦らなくても大丈夫というのは、日本は基礎が出来ているからでしょうか。

田代：むしろ海外のニーズをきちんと勉強してから、合理化要素を追求するつもりでもいいのではと思います。

再開発プロジェクトは日本が誇れる技術

中野：国内ではダムを造る所が減ってきたので海外にという話もあるのですが、再開発の技術を海外に展開することはありますか。

足立：特にダムの再開発、ダム再生の分野ですが、日本は非常に急峻な地形ですごく厳しいところにダムを造っているのです。ダムの再開発をするのにも相当な苦勞をしながら全国各地で取り組んでいます。日本で苦勞して学んだことは、海外に行くと、技術移転、技術展開をしていく上で役に立つと思います。



宮ヶ瀬ダム

すでに、日本は既存のダムを運用しながら、ダムの再開発をする技術を持っています。多分、諸外国はそういうことは出来ていない。今、ラオスでも放流管の新設という鶴田ダムのタイプの再開発工事が始まっていますが、日本のそういう技術をしっかりアジアで共有して頂いて、中国や韓国ではなくて、日本がしっかりと技術的な裏打ちを持ってやっていくことが大事だと思っています。これは国土交通省の技監の時にも皆さんと一緒にやってきたことです。

田代：ダムには、昔から国交省さんはじめ官・学・民という三者で、土木の中での高い技術水準を維持してきた力があると思っていて、国交省でいえば、開発課の技術とか、土木研究所の多くの人でも大体ダムに関係していた人でした。我々がこの世界に入ってきた時は、本当にそう感じていました。もちろん今でも土木、とくにダムの技術は世界的にも日本は優れているし、非常に高い技術を持っていると思っています。

だから、今の再開発の技術も非常に進んでいると思っていますし、ダムを造ること自体に関しても、例えばCSG工法を日本は先駆けてやっています。これから海外に貢献するという意味では、ダムは非常に多くの可能性があるのではないかと私自身は思っています。そういう意味では、今は経験を蓄積していくことが非常

に大事だと思いますね。

中野：市場を取られると思って余り慌てて出ていなくてもいいのかもしれませんが。ダムの技術は多様性というか応用性がすごくありますね。

足立：そうですね。

日本のインフラが危ない

足立：もう少し大きな視点で話させて頂くと、日本のインフラは、これまで、私たちも世界に冠たるインフラ大国だと思って整備をしてきたのですが、ここ10年、20年は、かなり公共事業予算も減ってきており、先ほど言われた老朽化対策とか維持管理といったところに回すお金も少なくなってきています。このような状況でふと立ちどまってみると、今、日本のインフラはもう世界一流でなくなっていると思うのです。国道でさえ、一桁国道でも、走ってみると舗装はガタガタな状態になっています。川には土砂が堆積して、河川敷には樹木が繁茂して、ちょっと水が出たら溢れてもおかしくないような場所が全国的に多くなっています。

国ではインフラの維持管理に対して、頭から否定的な人は余りいないと思いますが、実際にはそこに目が向いていない。もう少し注目して

頂いて、日本のインフラの現状は今世界の水準でどのくらいなのか、もう二流、三流じゃないか、ということを理解して頂けたら、もう少し公共事業予算を伸ばさなければいけないとか、工夫のしがいが出てくるのではないかと思います。

そういったことが、これからの私の大事な仕事になるのではと考えています。これまでは、全国津々浦々までインフラを造ることに注力してきた時代だったと思います。今後はそれらをしっかり維持管理が出来てこそ一流のインフラ国だと思えるのです。

中野：確かに。造るだけ造ってメンテナンスフリーで、もう大丈夫だよとはいかない訳ですね。そのタイムリミットがもう来ていることを言われています。ダムも長寿命化を考えて、これから先、保守点検をやっていかななくては行けない。でもダム技術のことを知っている人がいないとやれないのでそのことについては問題がありますね。

田代：むしろダムだけではなくて、ほかの構造物だって、構造を知っていないと保守点検は難しいです。また、今言われた一流をずっと保っていこうとしたら、点検だけではなく更新が大事で、少し良くしてプラスアルファを加えていかなければ一流を保てないのではないかと思います。そのためには、全体を見る目のある人がいなくなると本当に困ると思います。

ダムの将来について

中野：我が国のダムを巡る様々なお話を伺って参りましたが、足立さんに議員として今後取り組んでいきたいことをお聞きしたいのですが。

足立：まずは、ダムに対する誤解、これは世間一般だけでなく、国会の皆さんの中にもあると思うのです。民主党政権下では、ダム事業を止める、検証するということがありました。例えば、八ッ場ダムの工事を止めるとか、極端な

議論をされた方々がいらっしゃったのですが結果は皆さんご承知の通りです。

今後は、やはりダムが果たしている役割とか、これから果たすべき役割とか、先ほど温暖化の話もありましたが、そういったことを含めて、しっかりと彼らにも解って頂きたい。そのためには、国会で議論するだけではなく、ちゃんと知って頂くための機会を増やすことが大事になってくる。そういう役割を私が果たすことになるのではないかと考えています。

また温暖化の問題についても、これに対してまだ疑問を呈していて、ソフトだけで守ろうという人たちもいるのですが、ダム技術も含めて、治水対策面でも、しっかりと正しい認識を日本国内で皆さんに持つて頂くための活動を、私の一丁目一番地の活動として、最優先の課題としてやらなくては行けないと思っています。

中野：ありがとうございます。田代会長は、土木学会の会長として、今後取り組んでいくことは何でしょうか。

田代：私は、まずダムを含めてインフラの大切さをもう少し、より詳しく皆さんに理解してもらわなくてはと思っています。今の自分たちの生活が、どこで、どういう形で守られているのか理解してもらおう。というのも、日本の人が海外に行くと、いろいろな国で少しでも生活すると、日本での暮らし良さが、すごくよく解るはずなのです。その大もとが我が国のインフラ整備にあること、土木の仕事がきちんとされていることをもう少し解ってもらってもいいんじゃないかと思います。ダムだけじゃなくて。全体のインフラの大切さをもう少し学会として啓発できたらと思います。

それから、インフラの維持管理がちょっとおかしくなると、生活の基盤があつという間に崩れていく可能性もあるので、そういうことも強調したいと思っています。ダム造りには、さっき申したように、ありとあらゆる技術が含まれているので、ダム屋は土木の王様じゃないけど、そ

れくらいの誇りを持ってやってもらいたい。ダム経験者の人たちがこういった学会組織の基本となるところで増えていってくれると有難いという感じです。

若い技術者に向けて

中野：そうですね。一部分しか解っていないのと全体のことが解っているのでは、大きな違いでしょうね。今、お二人はすごく意気投合してお話しされていましたがコミュニケーションがとれている現場でないと、なかなか良い体験ができません。今はケンカしながら、怒られながらも、一緒に造っていく経験はなかなかできないのでしょうか。

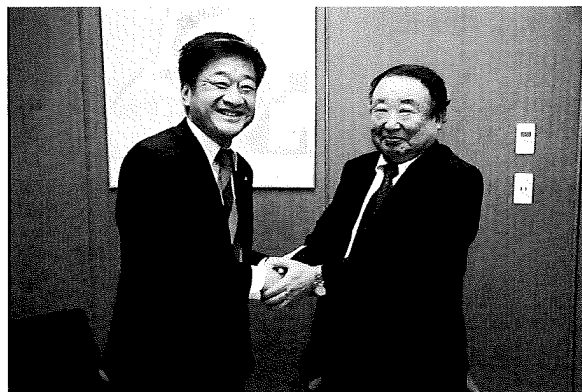
田代：新規のダム建設の現場が少ないですから、10年とか時間が掛かる現場でないとそういう経験を積むことは難しいでしょうね。

足立：発注者に少し問題があるのではないかと考えています。今は、仕事がだんだん複雑になって、書類も多くなって大変になってきています。すると、書類作成に追われて、技術論を闘わせることは余りなくなってきているのです。なるべく三者会議をやろうと言って、そういう場を設けるように指導してはいますが、現実問題なかなかできていません。しかし、私たちの時代は、月に1回、両所長が出ていろいろな課題をそこで議論してその場で決めるという会議をしていました。

田代：意見交換会などで、目標として三者会議をやろうとか言われると、「今さらですか」という感じですね（笑）。

足立：私たちの時代は会議するにも、もっと前向きにやっていたと思います。設計変更もその場で決めましたから、下準備はもちろん会議の場で担当者は大変でした。

田代：クイックレスポンス。一発勝負で決まり



ますからね。それでないと前に進まない。逆にそれが一体感をもたらすのです。

中野：気持ちを合わせないと前に進まないのですね。

足立：一緒に物を造っているという気持ちが大事です。レスポンスが早いだけではだめだと思うのです。

田代：そう。共同で決めていくことが、現場で働く人の思いと、出来たものを使う人の気持ちを考えることになるのです。自分たちがこれを造った後、そこを利用する人のイメージを常に持てと言われていました。お互いの利害関係だけでやるとぶつかることが多いのですが、我々は働いている人の気持ちを大事にしました。使う人のことを考えて仕事をしているイメージがみんなの共通意識になれば、結構仕事は進んでいくと思いましたね。だから、マスコミだとか外部の声が入り過ぎて、こういうことをしてはいけなとかいう意見ばかり聞いていると、だんだんおかしくなる感じがするのです。

中野：ネガティブな情報が先に発信されてしまうと、ダムは無駄だという言葉がひとり歩きしてしまい、センセーショナルに扱われることで感情に訴えられてしまうと負けますね。でも、これからインフラは大事にしていかなければな

らないということをもっと発信していかないといけないですね。

足立：そうですね。そこは大事ですね。

田代：今、建設業では若手不足で大変になりつつあり、担い手確保に一生懸命です。建設業はもう衰退すると思われた所に、みんながこの世界の必要性にもう一度、目を止めてまとまり出した雰囲気があるので、ぜひそれをダム屋が先頭に立って進めていきたいですね。一番いろいろな事を経験しているはずですから。

中野：そうですね。多分、ダム屋さんは打たれ強いでしょう（笑）。

田代：きっと打たれ強いですね。

中野：お二人のお話を聞いていると、ダムを造ることが楽しくて仕方がないのがよく伝わってくるのですが。

足立：それは嬉しいですよ。仕事をしていて楽しいです。私も田代さんも同じ現場にいたから、こうやって一生の付き合いになる。

中野：実に良いタイミングで土木からお二人がトップになられて、一緒に現場にいらっしゃっ

たのですから本当にすごいことです。今後にとくと良いですね。

田代：それはぜひ、私たちのような良い関係のダム屋さんが育ってくるとありがたいですよ。

足立：我々が最後のダム屋になってはいけませんから。

中野：これからの時代に向けて新しくスタートする。

田代：そう。昭和の高度経済成長期を経て、下降線を経験し、一区切りついた後、新しい形の再出発になってくれるとありがたいですよ。

足立：そうですね。

中野：確かに、若い人にも思いはきっと届くと思います。そういうことがどんどん現実化していくように私たちも考えていきたいと思いません。

本日は貴重なお話をありがとうございました。

(平成28年11月16日収録)